

信念の現象性は真理を目指すのか

ヒュームにおける信念と動機について

岡村太郎(アルバータ大学)

『人間本性論』においてヒュームは、「理性のみではいかなる行為も生み出し得ない」ことを主張する。この動機付けにおける理性の無力さは、しばしば理性のみならず、理性の産物、つまり「信念」の無力さに関する主張として理解されてきた。「信念のみではいかなる動機も生み出せない」という、現代の動機付けに関するヒューム主義と呼ばれる立場が典型的である(例えば Smith 1994)。しかしながら近年では、こうしたヒューム主義はヒューム自身の立場と相容れないと指摘する論者が多くなっている(例えば Cohon 2008)。主たる理由の一つは、信念が行為を生み出すことを、ヒュームが明示的に認めているということにある。

本発表では、ヒューム主義者のヒューム解釈を部分的に擁護することを試みる。もちろん、ヒュームとヒューム主義においては基本的な理論的枠組みが大きく異なっており(例えば命題的態度を中心とした心的状態の理解はヒュームには見られない)、彼らの立場の完全な連続性を論じるのは困難である(奥田 2004)。したがって本発表では、ヒュームがヒューム主義による「信念のみでは動機を生み出さない」という主張を受け入れるかということのみを問題とする。

まず、ヒュームが「信念は動機を生み出す」ことを認める時、どのような意味でそうなのかを検討する。ヒュームは信念を「現前する印象に関係あるいは連合している生き生きとした観念」(T 1.3.7.5)と定義する。つまり、信念は、(生き生きとした、という表現に示されるような)「現象性」と、「関係」という二つの特徴を持っている。これを踏まえると、ヒュームが信念の動機付けについて積極的に語るとき、動機づけは信念の「現象性」に依ることが明らかになる。痛みについての信念が、痛みの経験のような機能(欲求や行為を生み出すことなど)をもつことができるのは、その信念が、まるでその痛みを実際に経験しているかのような現象性を有するからである。

これを確認した上で、ヒューム主義が信念をどのように捉えているかを検討する。ヒューム主義を含めた現代において信念はしばしば、その「適合の向き (direction of fit)」やそれが「真理を目指す (aim at truth)」ことによって特徴付けられる。「真理を目指す」という特徴づけは依然として比喩的であるが、標準的には以下のように表現される。

信念 p が正しい (correct) のは、 p が真であるときかつそのときに限る。(Bykvist and Hattiangadi 2013, 101)

欲求や想像などの心的状態の場合、これは当てはまらないだろう。というのも、偽なること(例えば「太陽は西から昇る」など)を想像や欲求しても、そうした想像や欲求には何も咎められるべきことはなく、「正しい」態度でありうるからである。しかし「太陽は西から昇る」という信念は正しくないものであり、取り下げられるべきものである。こうした、真理と歩みを共にする正しさの基準を備えていることこそが、信念と他の心的状態を分けるものなのである。(「適合の向き」という考えにコミットしない論者でも、信念を何らかの真理への関係によって特徴付けることは標準的であるように思われる。) ヒューム主義は、このような規範(この発表では「真理規範」と呼ぶ)を満たしている心的状態(正しい信念)だけでは動機を生み出すことができない、と主張していることになるだろう。

ヒュームが「信念は動機を生み出しうる」ことを示唆するとき、それは信念の現象性に依るのであった。したがって、ヒュームが、「真理規範を満たす心的状態のみではいかなる行為も生み出し得ない」というヒューム主義的な主張を受け入れるかどうかは、信念の現象性が真理規範のもとにあるかということにかかっている。本発表では、信念の現象性は真理規範のもとにはないことを論じる。

まず、信念 p の現象性にとって p の真理性は十分ではない。長い推論の連鎖によって形成された信念について、ヒュームの観察によれば、そのような信念は活気ある現象性を失ってしまう。これは推論の各ステップが妥当であり、おそらくその結論が真であつてもそうである。

また、信念 p の現象性にとって p の真理性は必要でもない。ヒュームによれば、教育を通して形成された信念は、しばしば理性に反する。それにもかかわらず、そのような信念は幼少から慣れ親しんだものであるため、理性によって矯正することはできない。また、ヒュームの「理性に関する懐疑論」(T 1.4.1)は、その内容の真理性が確立されることなしに、われわれは活気ある信念をもつことができることを示唆している。

このように、信念の現象性にとって真理は必要でも十分でもなく、現象性は真理規範のもとにはないように思われる。予想される反論として、通常的信念(とその現象性)は依然として真理規範のもとにある、と言われるかもしれない。長い推論、教育、過度な懐疑論を通して形成された信念は「異常」なものであり、典型的なケースにおける信念の現象性は真理を目指しているかもしれない。事実、活気ある信念は、推論の自然な結果であるとヒュームは考えていそうである。

しかしながら、ヒュームは教育や長い推論、懐疑論のケースを、ごく限られた信念を記述するために用いているのではなく、信念の一般的特徴を示すために用いているように思われる。また、真理規範を受け入れなくとも、生き生きとした現象性が頻繁に真理に伴われることは説明される。そこで、真理(典型的には印象と観念の対応関係)は現象性の「乗り物」であるという理解を提案する。真理は現象性を運ぶことによって信念の生成に貢献するが、それ自体で現象性を生み出すことはできない。この理解が正しければ、真理は、せいぜい「間接的に」行為を生み出すことができるだけである。これはヒューム主義者達も認めることであるように思われる。彼らは目的と手段に関する信念は動機に間接的に貢献すると主張するからである。

これらを踏まえ、ヒュームとヒューム主義者は、「真理規範のもとにある心的態度は、それ自体では動機を生み出さない」という見解を共有している、と結論づける。

(文献)

Bykvist, Krister, and Anandi Hattiangadi. "Belief, Truth and Blindspots," in Timothy Chan (ed.), *The Aim of Belief*, Oxford University Press, 2013, 100-122.

Cohon, Rachel. *Hume's Morality: Feeling and Fabrication*. Oxford University Press, 2008.

Hume, David. *A Treatise of Human Nature: A Critical Edition*, Vol. 1, ed. D.F. Norton and M.J. Norton, Clarendon Press, 1739-40 (2007).

奥田太郎「マイケル・スミス のヒューム主義とヒューム道徳哲学の比較検討の試み」、『実践哲学研究』27, 1-28, 2004.

Smith, Michael R. *The Moral Problem*. Wiley-Blackwell 1994.